頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—
報告書

マウドゥーディーの出版活動と思想
—パキスタンにおけるイスラーム復興とウルドゥー語—

派 遣 者：須永　恵美子
派遣期間：2013 年 12 月 10 日～2014 年 2 月 24 日
派 遣 先：イスラーム党本部図書館（パキスタン）

キーワード：パキスタン，マウドゥーディー，出版，ウルドゥー語，イスラーム復興

1. 研究課題について

派遣者の研究は，パキスタンの国語とイスラーム思想を担う出版文化がどのように拡大してきたか，宗教家マウラーナー・マウドゥーディー（1903-1979）の書籍を題材に，その史的展開を追うものである。マウドゥーディーは20世紀中盤にパキスタンで活躍したイスラーム思想家・政治家であり，150冊以上のウルドゥー語の著作を残している。具体的には，マウドゥーディーが出版物をどのように使い，何を広めてきたのかを問うため，宗教書を例にそのモノと思想コンテンツを明らかにする。さらに，宗教と言語がどのような関係にあるのか，ウルドゥー語の単語の選択をアラビア語，ペルシア語の関係性から実証する。以上の三段階を経て，ウルドゥー語のメディアに乗るイスラームの性質を問うことが，本研究の目的である。

2. 派遣の内容

2013年度第1回目の派遣で訪れたパキスタン・ラホールのイスラーム党本部図書館を拠点として，ウルドゥー語出版に関わる臨地研究を継続した。日中は，前回の派遣から継続した資料収集や受入担当研究者の所属するパンジャーブ大学での意見交換をおこなった。また，今回は 2 月 20 日にパンジャーブ州の南部にある都市ムルターンのバハーウッディーン・ザカリヤー大学に訪問する機会を頂いた。同大学では，報告者と報告者の日本における担当研究者である山根聡大阪大学教授に加え，政治・経済・文化などの分野で日本を代表するパキスタン研究者らが「日本におけるパキスタン研究 2014」という国際セミナーにおいて発表を行った。報告者は本派遣での成果の途中経過とともに，南アジアにおけるイスラームの聖典クルアーンの解釈書について，南アジアの諸言語の観点から研究発表をおこなった。

写真 1: バハウッディーン・ザカリヤー大学における国際セミナーの様子

写真 2: バハウッディーン・ザカリヤー大学における国際セミナーで発表する報告者

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

今回の派遣では，前述のムルターンにおける国際セミナーでの発表が貴重な経験となった。報告者は昨年度からラホールを中心に研究活動を行っており，ムルターンという新たな都市や大学を訪れたことにより，学術的なネットワークを拡大できただけではなく，新たな知見を広げることができた。私見ではあるが，ムルターンの学生は学部にかかわらず，イスラーム研究に対する関心が高いように思われた。報告者は経営学修士（MBA）や経済学の学生から経典解釈書に関する質問をいくつも受けた。

また，前回・前々回の報告で目標として掲げていた女性のクルアーンの勉強会への参加を，継続することができた。今回の滞在では，勉強会を通して女性たちが自身の生活・人生・家族などを肯定的に捉えようと努力する姿勢が伺えた。一般的に，聖典クルアーンは決まった一つの解釈があるのではなく，信徒一人ひとりが自分の納得する解釈を選ぶことが認められている。例えば，財産分与の章句や，隣人との付き合い，親子関係などの話に話題が及ぶと，非常に積極的に議論をする様子が伺えた。さ

らに，勉強会の要所要所で「このような行いでは地獄に落ちる」「地獄の業火はこんなに暑い」などという死後の世界について語り・恐れ，「アッラーよ救いたまえ」と唱えているのが印象的であった。

4. 目的の達成度や反省点

今回の派遣では，国際セミナーにおいて調査中の研究成果を発表し，多くの批判や指摘をいただき，議論を深めることができた。ムルターンにおいては，バハウッディーン・ザカリヤー大学のウルドゥー文学部学科長ルビナ教授を始めとする教員陣に解釈書研究の意義を評価していただけた。その一方で，帰国準備と発表準備に追われ，各種セミナーや大学への訪問頻度がやや落ちてしまった。

また，ラホールにおける調査においては，古本市・古本屋を中心に資料収集を行った。大学の裏手や書店街の近隣にほぼ常設的に設けられている野外書店に加え，日曜日の公園などで開催されているブックフェア・古本市などを集中的に周り，多くの古書や情報を収集することが出来た。特に，マウドゥーディーの晩年にあたる 1970 年台に出版されていた論壇誌や文学誌を何種類も購入し，彼に関する賞賛や議論の記事をいくつも確認することができた。これは，同時代的にマウドゥーディーが評価・認識されていたことを示す良い資料となるであろう。

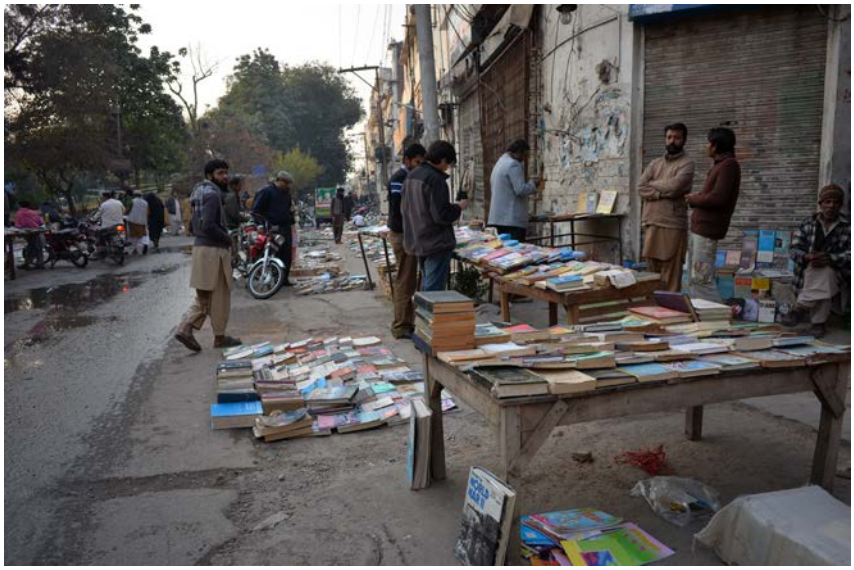

写真 3: アナールカリー市場近くの日曜古本市の様子 1

写真 4: アナールカリー市場近くの日曜古本市の様子 2

5. 今後の派遣における課題と目標

報告者のパキスタンにおける調査・研究は今回の派遣で，一旦終了となる。引き続いて，2014 年度にはイギリスのマークフィールド高等教育機関研究所において，臨地研究を計画している。この研究機関はパキスタンと関係が深く，報告者が主要な研究対象としている思想家マウラーナー・マウドゥーディーの片翼であった学者が創設者である。また，教員や研究員にも南アジア出身者が多く，マウドゥーディー研究が広く認知されている世界的にも貴重な研究機関である。2013 年度までの派遣がパキスタン内部から見るイスラーム復興やウルドゥー語の研究であったとすれば，イギリスへの派遣は対象を外側の世界，特に非イスラーム圏から見るための研究として位置づけられる。またイギリスでも同様に，イスラーム系の書店に加え，ウルドゥー語や文学を得意とする書店や出版社の調査にも取り組むことを課題とする。